

イベント大会におけるユニバーサルデザインの提言

障害者スポーツ大会を通じて *

A Study on An Sports Environment for Handicapped People *

北川博巳**・谷内久美子***・宮崎貴久****

By Hiroshi KITAGAWA**・Kumiko TAANIUCHI・Takahisa MIYAZAKI***

1. はじめに

障害者スポーツは、これまでリハビリテーションを主な目的に医療スポーツとして歩み始めたが、近年では健常者と同じように競技のため、健康の維持増進のため、あるいはレクリエーションなど生涯を通じて楽しめるものとして普及途上である。今後スポーツはアクティブな障害者・高齢者像を作り上げるためにも良い目的手段となりうるし、自己実現や目標達成のため、健康増進のため、社会参加促進、およびQOL (Quality of Life: 生活の質) の向上など、その果たすべき役割も変化し、スポーツ振興の意義も大きいと考えられる。

スポーツ振興の柱として、「施設の充実」「指導者の育成」「柔軟なルールづくり」「組織化の推進(仲間づくり)」「情報の提供」「継続性」などが考えられるが、とりわけ施設・設備の充実が急務である。近年建設されたスポーツ施設は、福祉のまちづくり条例に準じた形で設計されている場合も多く見られるが、施設を利用する際に障害者の立場から使いやすいものになっているかについては課題も多い。また、競技的な観点では指導的な立場に立てる人材の育成は課題であり、一般的にスポーツをする観点からは気持ちよくスポーツのできる環境づくりが重要となる。そのためにはボランティアの活用など様々な細かい配慮も必要となる。さらに、これらを広げてスポーツを一つのイベントにすることも重要であり、障害者への理解や交流の促進などはこのようなイベントを機に展開される可能性も高いことから、社会施策の中でも重要な位置づけになるであろうと思われる。

今後各地で全国障害者スポーツ大会の開催が予定され

*キーワード: 高齢者・障害者モビリティ、ユニバーサルデザイン、観光交通

**正員、博(工)、兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所
(兵庫県神戸市西区曙町1070、
TEL078-924-9283、FAX078-924-9284)
kitagawa@assistech.hwc.or.jp

****正員、大阪大学大学院

****正員、淡路市

ている。どの大会でもハード面・ソフト面両面にわたる様々な施策が必要である。そこで、本研究では、障害者利用の観点から施設の点検を行い、その改善策の提案を行うとともに、スポーツ大会を参考にしてソフト面での対策と課題について考察する。さらに、これらのイベントから得られる知見をもとにして、高齢者・障害者のスポーツ利用に配慮した運動公園の施設のあり方とその運営の課題について考察することを目的とする。

2. 研究の目的と方法

2.1 概要

本研究は障害者スポーツのしやすい環境に向けての課題を明確化し、今後の振興に向けてのあり方について考察することを目的とする。まず、障害者スポーツを通じての全体的な課題として以下が考えられる。

QOLが向上するようなスポーツのあり方(面白いルールづくりなど)

指導者、アシスト者の充実

施設・体制・情報の充実

交流機会の増加に向けた仕掛け

会場までのアクセス

宿泊を伴う場合(旅行なども関係)

などが考えられる。これら様々な要因を考慮して初めて、障害者スポーツが振興されると思われるが、本研究の位置づけとして、今後全国展開で実施されることや開催後も障害者スポーツの振興拠点となる可能性があることなどから、施設の充実と ~ までの運営上の課題とその手法を明確化することを目標とする。そのため、本研究ではハード面として、施設関係のバリアフリー化の現状を取りまとめ、ソフト面では障害者スポーツ大会の運営面を考慮した課題を明確にする。

3.2 研究の方法

施設関係調査

兵庫県では、ユニバーサル社会の早期実現を目指し、平成18年には全国障害者スポーツ大会が開催される予定

表1 バリアフリー調査のチェック項目

(1)建物内のチェック箇所		
・敷地内通路	・外部出入口	・床面
・廊下等	・階段	・エレベーター
・外部出入口以外の出入口		
・便所	・更衣室、シャワー等	
・駐車場	・視覚障害者誘導用ブロック等	
・案内	・記載用カウンター	・公衆電話場
・授乳室等		
(2)公園内(屋外)のチェック箇所		
・出入り口	・園路	・階段
・便所	・駐車施設	・案内等

である。兵庫県は平成4年10月に制定した「福祉のまちづくり条例」の「特定施設整備基準」により、体育館等の公益的施設および運動公園等の公共施設の建築、大規模の修繕等に対して「特定施設整備基準」の遵守を義務付けている。また、障害者スポーツ大会の開催に当たっては、数年前から各種の事業スケジュールが立てられており、宿泊・会場・輸送交通計画も立てられている。さらに、施設整備の改善は多額の費用を要し、短期間での施設再整備も現実的ではない。よって、本研究はのじぎく兵庫大会が開催されることを機に各施設の管理者、利用者、関係者が一体となって効率的な施設の再整備が促進されるような方策を考察することを目的とする。

本調査ではこれらの観点から、予定会場の現地調査を行い、改善案の提案を行うことにより、身体障害者を含む全ての人々が利用しやすい運動施設の整備改善について調査する。具体的な進め方として、福祉のまちづくり条例施設整備マニュアルによるチェック、および現実の身体障害者への対応実態調査を行なう。とくに対応調査については、マニュアルどおりの整備ができていなくとも、少々の工夫と配慮で対応できる可能性もあることから、必要に応じてこれらの実態を把握する。

ちなみに、「のじぎく兵庫大会」の会場となる施設については、「福祉のまちづくり条例」施行以前に建築されたものがほとんどで、「特定施設整備基準」に合致しない箇所が多い。そのため、「のじぎく兵庫大会」実行委員会事務局が実施した「のじぎく兵庫大会利用会場における障害のある方によるバリアフリー調査結果」を参考に、早期改善が必要と考えられる事項についてコメントを付している。本研究では開催10会場のうち、今回は7会場についての調査を実施した。調査は昨年の初頭に実施したため、現在は改良されている箇所もあることを付記しておく。

運営調査

障害者スポーツ大会の開催を考慮する際には施設整備だけでなく、宿泊・交通など様々な面も考慮せねばならない。また、ボランティアの活用等ソフト面にも配慮した

様々な施策が必要となる。ここでは、障害者スポーツ大会を参考にしてこれらの対応と課題について考察する。また、第5回開催地の岡山大会を対象とした現地調査と担当者のヒアリング調査から運営上の対策と課題について考察する。

3. 点検結果から見たハード面の課題

3.1 のじぎく兵庫大会事務局が実施した点検結果

「のじぎく兵庫大会」実行委員会事務局では生涯のある方によるバリアフリー調査を実施している。本研究では、「のじぎく兵庫大会利用会場における障害のある方によるバリアフリー調査結果」を参考に各会場の改善提案を行なった。なお、この調査では、

区分：一般 = バリアフリーの観点に関係なく対応が必要と思われるもの

区分：バリア = バリアフリーの観点から対応が必要と思われるもの

区分：大会 = 主として「のじぎく兵庫大会」開催時に対応が必要と思われるものの3つに分割されている。

3.2 その他点検の結果

本研究では、上記の調査結果に付加した形で追加調査を実施した。調査は兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所のスタッフが各会場の現況を調査し、上記調査に付加すべき項目と早急に望まれる改善策を提案した。その結果、主として会場のバリアフリー環境に関することが上記調査では得られたが、この調査では駅から会場までのルートでのバリアフリーに関する事項や施設内、とくにトイレに関する一連の問題点を指摘できた。また、早急な改善策としては、選手が使用する部屋に対する改善策などについても盛り込むことができた。

4. 障害者スポーツ大会から見た運営面の課題

4.1 調査の概要

本研究では、障害者スポーツ大会の開催に当たって配慮すべき事項を整理する目的で、第5回開催地の岡山大会を対象とした現地調査と担当者のヒアリング調査から運営上の対策と課題について考察することを目的とする。本研究では地元での活動や主催者側の岡山市に対していくつかのヒアリング調査を実施し、スポーツ大会当日の現況調査を実施した。

4.2 ヒアリング調査

今回ヒアリング調査に当たっては岡山市国体・障害者スポーツ大会局の協力を得て実施した。岡山大会では国体

と障害者スポーツ大会を同一局で運営していたことが特徴的であった。今回のヒアリングに当たっては、施設のバリアフリー面よりはむしろ、大会の運営面を主にヒアリングを実施し、項目として、障害者スポーツ大会の参加人数、事前準備の実施状況、宿泊・輸送・交通の状況、ボランティアの活用状況、その他の企画について調査した。また、追加的な調査として、スポーツ大会の運営をサポートしている一般市民にもヒアリングを実施した。つぎに、その結果を表4に示す。

これらのヒアリング結果をまとめると、とくに 地元団体を活用したきめ細かい配慮、一般的なボランティアと特殊技能を有するボランティアの2タイプの確保、地元宿泊施設での研修や障害の理解促進のための交流に関する各種の企画の3つが重要であると考えられる。また、このイベントが契機となっていくつか道路整備がなされたり、地元小学校・中学校の教育機会ができたりとイベントならではの効果があることが分かった。

4.3 現地での運営調査

前章で、会場のバリアフリー化と会場までのアクセスルートをバリアフリー化することが重要であることに触れたが、一方で短期間での整備の難しさや軽微な対応で済むのであればそのような対応も必要であることを述べた。第5回全国障害者スポーツ大会（輝いて！岡山大会）が11月5日～7日まで岡山市を中心とした各地で開催された。そこで、本研究では現地での対応や運営について、どのようにして課題解消をしているのかを会場周辺を調査した。調査場所として、岡山市総合運動公園と岡山市総合文化体育館を選定した。ここで、とくに印象的な項目として、大会の開催によって国道が整備され、バリアフリー整備の一つの契機となっていること、これまであまり明確化されていなかった知的障害者に対するサインについて一つの試みをしていること、地元の学校が作成したポスターや応援団、および縁日の出店など多くの交流機会が提供されていたことが挙げられる。また、いくつか仮設対応せざるを得ないことについては、仮設用車いすトイレの確保やスロープの設置などを行っていた。

5. 考察とまとめ

本研究は、障害者が活動しやすい運動公園の整備を題材とし、今後のスポーツ振興の柱として、施設・設備の充実とスポーツのできる環境づくりの一つのアプローチとして、障害者スポーツイベントとしての障害者スポーツ大会に着目して、ハード面・ソフト面両面にわたる様々な施策と課題について調査した。

まず、これらの調査から得られた知見をまとめると、以下ようになる。

施設整備面での課題として、短期的な整備となることから仮設的な対応を取らざるを得ない部分が生じてくることが分かった。しかしながら、このようなイベントが契機となって道路整備・施設整備などに繋がることもあり、スポーツ振興を更に広げて大きなイベントにすることも重要であるということが分かった。

運用面では柔軟な対応が必要となる。これについてはとくに情報面の充実が挙げられる。施設やアクセスルートのバリアフリー情報や知的障害者に対応したいくつかのサイン計画などはイベント開催時には重要なパートとなりうる。また、仮設対応についても物品等の確保と効果

表2 運営上の工夫点

大会の参加人数	選手3500人、役員2000人が参加 応援は3500人を予想（岡山県内の人が多い）
事前準備の実施状況	平成15年より点検調査実施 情報面ではNPO団体の活用と協働 仮設スロープや手すりの手配 専門委員会がサインとトイレを企画 施設周辺の国道でもバリアフリー対応を実施 地元学校での応援ポスター作成など
宿泊・輸送・交通の状況	無料シャトルの運行 宿泊は県が把握しており斡旋 県で介護研修をして、ホテル従業員に学習機会を提供
ボランティアの活用状況	サポーター制度の導入（体育・看護学校の学生1000人） 一般的なボランティアを公募し説明会を開催
その他企画	車いすバスケットボールは地元中学校と対戦・交流し理解の促進 商店街などの理解 キラリネット（学生ボランティア団体）がマップを作成 情報誌での特集を企画したが予算がなかった 会場内での交流企画（展示や縁日）
一般市民の意見	バスとの連携が悪い 応援など交流が大切 ボランティアの活動制限が多い 夜の観光なども視野に入れて 道路の連続性は良くない 地元放送局などに介入してもらい盛り上げる

率的な運用が必要となる。そのためには利用者（観客・選手）の需要の推定やニーズをどれだけ汲み取れるかが必要であり、市民や県民を巻き込んだ形の運営が必要となる。

利便性だけでなく、このようなイベントを開催するには様々な人たちの交流機会の増大をするような仕組みが必要なが分かった。とくに、イベントは学校・地域住民・一般市民と障害者の交流が促進される絶好の機会となりうるし、地元が他都道府県の応援をすることに

よって大会も活性化する。

ボランティアの確保は重要であり、一般的なボランティアと専門的なボランティアが必要なことが分かった。また、宿泊施設については介護研修も含めた形で地元の宿泊施設・商店などの参画も重要となることが分かった。

輸送・交通面については広域的なエリアでの開催なのでどうしても問題点が残ることが分かった。選手の移動については、バス利用ということもあって問題点はないとのことであったが、円滑な移動手段の確保は今後も重要な課題であり、一般的な観客に対してどのような手段で移動してもらうかについては今後も考察が必要である。

表3 会場のバリアフリー化などの工夫

総合運動公園	国道の改良（道路横断帯（エスコートゾーン））や部分的な段差ゼロ 知的障害者に対応したサイン（ひらがな表記）やピクトグラム 仮設用車いすトイレの多数設置 交流機会の提供（緑日や作業所の出店など） 地元中学生による応援
総合文化体育館	仮設スロープの設置 交流機会の提供（緑日や作業所の出店など） 地元中学生による応援 筆記ボランティア 知的障害者に対応したサイン（ひらがな表記）やピクトグラム

最後に、障害者がスポーツ活動のしやすい環境について考察を加えると以下ようになる。

障害者スポーツの振興は今後のQOLの向上からも広く普及してゆくことが重要である。当面的な課題として、スポーツを行なう環境整備が重要となるが、スポーツを「観る」環境整備も重要となるであろう。近年競技場も車いすスペースの確保などの対策が取られているが、多数の観客がいる中でのアクセス手段や視覚障害者への状況説明など様々な対応が今後考えられるであろう。

スポーツを通じた他者との交流は非常に重要となる。とくに、障害者同士のつながりの促進もさることながら、学校・地域住民・一般市民と障害者の交流が促進される絶好の機会となりうるし、スポーツイベントと拠点整備によって、様々な活性化策にもつながることとなる。

このようなイベントを教材に学ぶことができる。近年心のバリアフリーと言われているが、このようなスポーツイベントにより相互理解と交流も促進されるという効果に繋がる。たとえば、シドニーオリンピックでは、全国の小中学校で積極的にオリンピック教育を展開してきた³⁾。障害者スポーツ大会でも今後学校教育や相互理解のための場として活かされることが期待できる。

様々な競技者・観客が大会を訪れることから宿泊・食事・交通などを考慮せねばならず観光のユニバーサルデザインなどに通じる知見であると思われる。

以上、障害者のスポーツ振興はこのように様々な効果が得られることから今後の環境整備は非常に重要であると考えられるし、これから各地で開催される障害者スポーツ大会が一つの契機となって環境整備に一役立てればと期待している。

参考文献

- 1)財団法人日本障害者スポーツ協会：「障害者のスポーツとは？」，<http://www.jsad.or.jp/>（最終訪問日 平成18年3月13日）
- 2)兵庫県：「のじぎく兵庫大会」，<http://web.pref.hyogo.jp/zenspo/index.htm>（最終訪問日 平成18年3月13日）
- 3)独立行政法人スポーツ振興センター：「論集「スポーツ文化」創刊号 / 交流がもたらす人にやさしい豊かなスポーツ - オーストラリアにみるスポーツ文化」<http://www.naash.go.jp/muse/culture/tahara.html>（最終訪問日 平成18年3月13日）